

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

性空上人

天女舞い降りる書写山の桜



伝説 性空上人
天女舞い降りる書写山の桜

紀行 円教寺と弥勒寺
・書写山円教寺
・弥勒寺

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

性空上人 天女舞い降りる書写山の桜

性空上人(しょうくうしょうにん)は、橘家(たちばなけ)という名門貴族の子として京の都で生まれました。そして生まれたときから、仏様に守られた一生を約束するような伝説に包まれていました。

性空の母には、すでに何人かの子がいましたが、どの子もひどい難産でした。そこで性空を身ごもったとき、流産させてしまおうと毒を飲んだのですが、流産しなかったばかりか、不思議に安産であったといえます。

生まれた赤子は、左手をしっかりとにぎりしめていました。不審に思った両親が開いてみると、にぎられていたのはなんと一本の針だったのです。針が糸を導くように、この子は人々を導くようになるにちがいない。この話を伝え聞いた人は、赤ん坊は普賢菩薩(ふげんぼさつ)の生まれ変わりにちがいないと、うわさしあうのでした。

赤子は仲太小太郎(ちゅうたこたろう)と名付けられましたが、成長するにつれ、その才は目をみはるものになってゆきました。十歳になった時には、早くも藤原大納言(ふじわらのだいなごん)の若君の勉強相手として仕えるようになっていました。

ある日仲太小太郎は、大納言家の家宝のすずりを手にとってながめていて、割ってしまいます。若君は友をかばおうと、父の大納言に「割ったのは私です」と申し出ました。それを聞いて怒った大納言は、息子の首を打ってしまったのです。

仲太小太郎は、自分のせいで友の命が失われたことに、ひどく打ちのめされました。若君をとむらうために出家しようと考えましたが、息子が貴族として高い位に進むことを望んでいた小太郎の母は、なかなか許してくれません。しかしある夜、母の夢に文殊菩薩(もんじゅぼさつ)があらわれます。

「早く、そなたの子を出家させよ。」

文殊菩薩のお告げに、母もようやくそれを認め、小太郎は性空と名乗って仏に仕える身となったのでした。

九州へわたった性空は、霧島山（きりしまやま）にこもって修行を続けました。性空が庵（いおり）にこもって読経（どきょう）の日々を送っていると、いつのまにか窓の下に、三枚の餅（もち）が置かれています。それを食べるとたいそうおいしかったのですが、不思議なことに何日たっても腹が減りません。こうして性空は、法華経（ほけきょう）を極めたといえます。

さらに背振山（せふりやま）に移って修行を続けるころになると、性空には二人の童子がつき従うようになりました。童子は乙丸（おとまる）、若丸（わかまる）といい、乙丸は不動明王（ふどうみょうおう）の、若丸は毘沙門天（びしゃもんてん）の化身（けしん）だったといえます。童子たちは、性空が何も言わずともその心を察し、性空とともに経を読みました。

こうして30年近い修行を終えた性空は、京へ上る道を選びます。

京への道をたどる性空の上には、紫色に光る雲が道を示すように流れていました。ところが、播磨路（はりまじ）に入ると、その雲が一つの山の上にとどまって動きません。そこで性空がその山へと分け入ってみると、一人の老僧に出会いました。

「この山は書写山（しょしゃざん）という山で、釈迦（しゃか）が教えを説いた天竺（てんじく）の、靈鷲山（りょうじゅせん）の土が納められている。この山に住めば、人の六根は仏と同じようにすみわたるだろう。」そう告げると、老僧はたちまち文殊菩薩の姿となって消えたのでした。

性空は京へ上るのをやめ、書写山に住みました。六根が清浄（しょうじょう）となった性空は、世間の欲を捨て、そまつな庵でただひたすら法華経を唱えて過ごしました。書写山にある桜の木には、毎年花のころになると、天女さえまい降りたといえます。やがて性空は、この桜に如意輪観音像（によいりんかんのんぞう）をほり、その像を納めるお堂を建てました。これが、現在の円教寺摩尼殿（えんぎょうじまにでん）となったのです。

性空には、さらにさまざまな伝説が生まれます。それを一つ一つ取り上げることはとてもできませんが、いくつかを紹介（しょうかい）しましょう。

ひとつ目のお話。鍋（なべ）の中でふつふつ煮られている豆と、ぱちぱちと燃やされる豆殻（まめがら）の音が、こんなふうに聞こえたそうです。

「他人でもないお前が、私を煮るなんてひどいじゃないか。」

「私だって好きでやっているわけじゃないよ。焼かれる身だってつらいのだ。」

ふたつ目のお話。性空と親しかった僧たちは、何も言わないのにほしかった品をおくられておどろくことがしばしばだったと言います。ある僧はよい紙をおくられ、またある僧は沐浴（もくよく）をする湯釜（ゆがま）をおくられて、おどろくと同時に性空が心を読む力に感じ入ったそうです。

年を経るとともに性空の名は高まり、位の高い貴族や、中宮（ちゅうぐう＝天皇の夫人）彰子（しょうし）といった人々が、書写山を訪れるようになりました。しかし性空は、人が訪れるほどに身を引くようになり、ついに書写山の北に庵を造ってこもってしまいます。

花山法皇（かざんほうおう）が説法を聞くために性空を訪れたのは、そんな時でした。この時、花山法皇は一人の絵師を連れていました。絵師はとなりの部屋で、さきほど会った性空の顔を思い出しながら描いていたのですが、そのさなか、とつぜん地震が起こります。はげしいゆれに思わず落としそうになった筆先から、性空の絵姿にひとしずくの墨（すみ）が落ちました。しかし後になってよくよく見ると、その墨のあとは、絵師が見忘れていた性空のほくろと同じ場所についていたということです。

数多くの伝説に包まれて、性空は98歳で、その長い一生を終えました。

紀行「円教寺と弥勒寺」

書写山円教寺

書写山円教寺(しょしゃざんえんぎょうじ)は、姫路市街の北西にある。夢前川(ゆめさきがわ)と菅生川(すごうがわ)に挟まれて、南北にのびる尾根の南端にある山頂は、標高371m。ふもとからロープウェイに乗り、播磨灘(はりまなだ)を遠望しながらゆくと、数分で山上駅に到着する。兵庫県のレッドデータブックで、「貴重な自然景観」にあげられている山は、緑が濃く、季節ごとに美しい姿を見せてくれる。



摩尼殿

書写山
(日本真景・播磨・垂水名所図帖)円教寺
(播州名所巡覧図絵)

円教寺(摂播記)



山門



摩尼殿(縁)

山上駅からは参道を歩く。近畿自然歩道の一部でもある参道は、木々の香りが心地よい。途中に分岐があって、どちらへ進んでもかまわないのだけれど、左は整備されたバスも通る道なので、足が辛くなければ右の道を行くことにしたい。道に沿って、西国三十三か所の観音像が立ち、やがて仁王門を経て摩尼殿(まにでん)前へと導かれる。

摩尼殿は壮麗な建物である。現在の建物は、昭和初期に再建されたものだが、創建は平安時代である。伝説では、この場所に桜の木がって、そこへ天人が舞い降りて礼拝していたのを見た性空上人(しょうくうしょうにん)が、桜に如意輪観音像(によいりんかんのんぞう)を彫り、像を安置する堂を築いたのが始まりとされている。

かつてあった建物が、大正時代に全焼したのは残念の極みだが、半ば山の斜面にかかって建てられた現在の堂も、前庭の広場に植えられたモミジの木と相まって、絵のような風景を見せてくれる。この摩尼殿には、重要文化財の四天王像が祭られている。

弁慶のお手玉石
(護法石)弁慶のお手玉石
(護法石)

鬼面



鬼追い



食堂から見る大講堂



食堂の内部



食堂の内部

摩尼殿のわきを通って奥へと進むと、5分ほどで大講堂、食堂（じきどう）、常行堂の三堂が並ぶ広場に出る。三堂ともに重要文化財。壮麗な摩尼殿とは趣を異にし、明るくて質素だが重厚な印象。映画『ラストサムライ』（2003年）の撮影に使われた場所である。

大講堂には、釈迦如来像（しゃかにょらいぞう）、文殊（もんじゅ）・普賢（ふげん）の二菩薩像（ぼさつぞう）、常行堂には阿弥陀如来像（あみだにょらいぞう）があって、いずれも重要文化財に指定されている。

食堂の二階では、さまざまな歴史資料や寺宝の展示が見られる。それ以上に、建物を一巡りする葎戸（しとみど）が並んだ腰縁（こしえん）の簡素な風情は、一見するだけの価値がある。



弁慶の机



葎戸を上げる



開山堂

そこから歩くこと数分で奥の院まで行けるから、「奥の院」という言葉にしり込みせず、ぜひ訪ねてほしい。三堂があった明るい空間とはうってかわって、しっとりとした空気の中に落ち着いたお堂が並んでいる。

豊かな森に包まれた書写山が、性空上人が過ごしたころと異なるのは、訪れる人の多さと山から望む町の景色だけである。



弁慶の鏡井戸



弁慶の鏡井戸



奥の院



弁慶の学問所(護法堂拝殿)

弥勒寺



説明板



石の橋

弥勒寺（みろくじ）は、書写山の北約5kmの夢前町寺（ゆめさきちょうてら）にある。性空上人が、書写山からさらに隠れ住んだ寺だけに、より山深い里にぼつんと建つ、小さな寺である。

夢前川の谷をさかのぼり、中世の山城として有名な置塩城跡（おきしおじょうせき）がある城山のふもとで、道を西へと入って行くと、やがて左手に小さな石造りの橋がかかり、その先にのびる参道が見える。

白壁の塀に挟まれた参道をゆっくり上って、門を入ると、質素な本堂と丁寧に手入れされた庭であった。そこにたたずんでいると、木々のざわめきや鳥の声の他には、何も聞こえない。今よりももっと何もなかったころ、性空上人はここでどんなことを考えたのだろう。



弥勒寺開山堂



弥勒寺本堂



弥勒寺本堂は、室町時代に守護の赤松義則（あかまつよしのり）によって建てられたもので、本尊として平安時代の弥勒菩薩像（みろくぼさつぞう）を祭っている。ともに重要文化財であるが、このほかに性空上人が自ら彫ったという、木造の地藏像が安置されているという。性空上人の出生の話とも重なって、このお地藏様は子安地藏様（こやすじぞうさま）として信仰が厚いそうである。2007年のお正月には、この像が1000年ぶりに公開されるというニュースがあったが、わずか3日間の公開だったのでご覧になった方は多くないだろう。いつかまた、公開されることがあれば、是非お参りしたいものである。



蓮華



鳥

性空上人の生涯からは、権力や栄達といった世俗を嫌い、その臭いに敏感だったということがよくわかる。けれども伝説のように、たとえば法皇や中宮というような高い地位にある人であっても、真に仏の道を探ねたい人に対しては、胸襟（きょうきん）を開き、懇切に接した人であったことも確かなようだ。高ぶらず、人におもねることもなく、ただ淡々と、一心に仏道をおこなった人なのだろう。その生涯を思うとき、現代の私たちの生き方をかえりみずにはいられない。

用語解説

【書写山円教寺】しよしゃざんえんぎょうじ

姫路市書写にある天台宗の寺院。書写山と号する。康保3（996）年、性空上人が開基。

伝説によれば性空は、九州で修行して法華経を修めた後、瑞雲（ずいうん）に導かれて書写山に庵（いおり）を結んだとされる。

10世紀後半に、国司藤原季孝（ふじわらのすえたか）の寄進により法華堂が建設されて以降、堂宇の造営が盛んとなり、講堂、常行堂などの諸堂が建立された。翌年、円教寺の寺号をもって花山法皇の勅願寺となった。その後は、平清盛による一切経の施入、後白河法皇の参籠、後醍醐天皇の行幸など、天皇、貴族の手厚い保護を受けた。1331年には落雷によって堂宇の大半を焼失したが、守護の赤松氏の保護の下に復興に努めて再興した。

現在、円教寺の国指定文化財は下の通り。

<重要文化財>

（建造物）

大講堂・鐘楼・金剛堂・食堂・常行堂（常行堂、中門及び楽屋、舞台からなる）

護法堂（乙天社及び若天社）2棟・壽量院

（仏像）

木造釈迦如来及び両脇侍（わきじ）像

木造四天王立像

木造阿弥陀如来坐像（常行堂本尊）

【兵庫県レッドデータブック】ひょうごけんれっどでーたぶっく

兵庫県の健康生活部環境局自然環境保全課が編集した、県下において保全・保護の重要度が高い環境、生物を選定・収録した報告書。2003年に改訂版が刊行されている。選定されているのは、動植物種、植物群落、地形、地質、自然景観で、それぞれ基準を設定して重要度別に区分されている。

【通宝山弥勒寺】つうほうざんみるくじ

姫路市夢前町にある、天台宗の寺院。書写山円教寺の奥の院とも呼ばれ、密接な関係がある。長保2（1000）年に、性空が隠棲（いんせい）して草庵（そうあん）を結んだのが始まりとされる。その後、花山法皇（かざんほうおう）が行幸し、播磨国司に命じて諸堂を建立させたという。

14世紀後半に、赤松義則が建立した本堂と、本尊の弥勒菩薩および両脇侍像（わきじぞう、平安時代）は、国指定重要文化財。

【性空】しょうくう

平安時代中期の天台宗の僧（？～1007年）。九州の霧島山や背振山で修行の後、播磨の書写山に入り円教寺を開いた。花山法皇（かざんほうおう）の2度にわたる行幸をはじめ、多数の支持者を得た。晩年は、姫路市夢前町に弥勒寺を建てて隠棲（いんせい）した。

【法皇】ほうおう

正式には太上法皇という。太上天皇（天皇の位を譲った人。略して上皇という）が出家した場合の称。

【中宮】ちゅうぐう

広義には、皇后、皇太后（先代の天皇の後）、太皇太后（先々代の天皇の後）の三者の総称。内裏の中央の宮に住むことからつけられた呼び名である。狭義には、平安時代以降一人の天皇に対し複数の后が立てられたとき、最初に立てられた后（正規の皇后）以外のものを指す。歴史用語では、狭義の意味に用いられることが多い。

【守護】しゅご

鎌倉・室町幕府で、国単位に置かれた職。初期には惣追捕使（そうついでし）と呼ばれた。明確な制度として成立するのは、源頼朝が挙兵した直後（1180）に、有力御家人を東国諸国の守護人に任じてからである。

守護は一国内の軍政を担当し、大番催促（おおばんさいそく：京、鎌倉の警護）、謀反人の追捕、殺害人の追捕を基本的権限とした。これを大犯三箇条（たいぼんさんかじょう）という。南北朝期になると、守護はその任国に対する権限を強め、守護大名へと変質していった。

【赤松氏】あかまつし

中世播磨の豪族。赤松は佐用荘内の地名。赤松則村（円心）が足利尊氏に属し、新田義貞との戦いに勝利して守護に任じられた。後には備前、美作の守護にもなり、幕府の四職（ししき、室町時代の武家の家格。三管・四職と総称する。三管とは管領に任じられる、斯波（しば）、細川、畠山の三家、四職とは侍所頭人に任じられる、赤松、一色、山名、京極の四家をいう）として室町幕府の重臣となった。

しかし1441年に赤松満祐（あかまつみつすけ）が將軍足利義教を殺し、幕府軍の攻撃を受けて一族は没落した（嘉吉（かきつ）の乱）。その後赤松政則が再興したが、家臣であった浦上氏、宇喜多氏に領国を奪われ、さらには関ヶ原の戦いで西軍に属した赤松則房が戦死。一族は断絶した。

赤松義則（1358～1427）は、室町時代の武将。赤松満祐は義則の嫡男、政則は玄孫にあたる。

【六根】ろっこん

仏教で用いられる言葉。人の感覚や意識を生みだして、さまざまな欲望や迷いを起こさせるものになる六つの器官のこと。眼（げん）・耳（に）・鼻（び）・舌（ぜつ）・身（しん）・意（い）をいう。眼・耳・鼻・舌・身が外部からの刺激を感じ、それによって意が生じる。六根から生じる迷いを断てば、清らかな身になることができるとされ、これを「六根清浄（ろっこんしょうじょう）」という。

参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
歴史・文化等	兵庫県大百科事典（上・下）	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	はりま伝説散歩	2002	橋川真一	神戸新聞総合出版センター

所在地リスト



円教寺	姫路市書写2968
弥勒寺	姫路市夢前町寺

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日